

がん社会 を診る

中川 恵一

これまで日本では、患者が自身のがんを詳細に語った例はほとんどありませんでした。しかし、6月22日、34歳の若さで乳がんで亡くなった小林麻央さんは、2016年9月1日に開設したブログ「KOKORO。」で、闘病の実態や日々変わる体調、心の揺れや葛藤などをつづり続けました。

ブログは亡くなる2日前まで計352回更新されました。私もその1人でしたが、読者数は250万人を超えました。英国放送協会(BBC)は昨年11月、多くの人に勇気を与えたとして、日本人で初めて「ここの女性100人」に彼女を選びました。実際、がんで亡くなるまでの過程をこれほど多くの日本人が追体験したことはこれまでになかったと思います。

母親が絞ってくれたオレシジュースがおいしかったと



イラスト・中村 久美

最期まで自分らしく生きる

「今年6月20日の最後の投稿は次の言葉で締めくくられていました。「朝から笑顔になれます。皆様にも、今日笑顔になれることがありますように」。痛みやだるさがあったはずですが、麻央さんは家族や読者への感謝と配慮を忘れませんでした。」

今回のケースを見ても、がんは亡くなる数日前でもブログを更新できる病気だと思いません。緩和ケアをしっかり行い、痛みをとれば、がんは最期まで自分らしく生きることができると言えます。

慢性の心臓病や呼吸器疾患の多くは、急な病状の悪化を繰り返しながら、徐々に機能が低下して死に至ります。認知症や老衰では、もともと低い機能がゆっくりと、さらに低下しながら死に至ります。脳卒中などの後遺症でも同様です。その点、がんでは比較的長い間身体の機能が保たれ、最後の数日から数週間で急速に悪化することが普通です。

女優の川島なお美さんも胆管がんで亡くなる8日前までミュージカルの舞台に立ち、前日までブログの更新を行っていました。私が尊敬する米アップルの共同創業者、ステイブ・ジョブズ氏も56歳の若さで膵臓(すいぞう)がんで亡くなりましたが、死亡する前日まで仕事をしていたといわれます。

適切な緩和ケアが前提ですが、がんは人生を仕上げ、愛する人たちとの時間を与えてくれる病気です。私もがんで死にたいと思っています。

(東京大学病院准教授)